

確であるとしても、net の値をみるとときには過大な値を與えることになる。これらの點は推計者においてももちろん氣附かれていた點であると思う。ただ何等の形で政府資本形成の減價償却分の推計が 23 年以前についても與えられ、そして資本偶發損が推計されたならばと考えるのである。

(2) 法人企業の生産者耐久施設について。この項目については、昭和 5—12 年は「統計年報書」の「會社表」より自己資本額を求め、これに三菱經濟研究所調「本邦事業成績分析」による固定比率を適用して各年度末現在の固定資産額を推計し、各年度の増加額を純生産施設としている。しかしこの方法によれば、純生産施設に土地購入の外、特許權・借地權・および「營業權」のような無形資産も含まれることになり、それだけ純生産施設を過大評價することになる。何等かの方法でこれらの部分が控除されることが望ましい。

昭和 13—22 年については、「産業別投資額」および「新規事業設備資金認許可額」による事業設備資金額を純生産施設とみなしているが、これらの資金がそのまま實物化されたとしても、土地などについて上と同様の危険がありはしないだろうか（またそのまま實物化されず、他に流用されることもありうると思われる）。

また昭和 25 年度に關し『一般産業について、「4 半期別法人企業統計調査」の「土地」、「建物」、「その他の有形固定資産」の新設（更新を含む）から減價償却費を差引いた純生産施設を求め……』（p. 358）と述べているが、本書では土地の購入は資本形成を構成するものであると考えられているのであろうか？

(3) 國富の戦争被害について。第 3 に指摘したいことは（そしてそれは最も重要であると思うが）、戦争の國富に與えた影響について資本形成推計上考慮が加えられていないという點である。この缺陷は國內資本形成の各項目のすべてについて生じているように見える。この戦争被害國富は當然資本偶發損に計上されるべきものであるにもかかわらず、實際の推計ではただ損害保險と森林火災保險が考慮されているにすぎない。上の法人企業の純生産施設に當るとしてとられた事業設備資金の中には、そしてまた戦後における法人企業の純生産施設とされたものの中には、單なる戦災補填部分に過ぎないものがあったであろう。法人企業の在庫品増加は主として金融統計から推計されているが、そこにも戦災を無視して過大評價を生じしめているのではないだろうか。さらには政府の投資支出についても上述のような資本減耗引當の推定法がとられている限りそうである。個人住宅、個人企業の資本形成についても資本減耗部分が過少になってい

るおそれがある。いま本書 p. 3 に記されてある戦時中の住宅・橋梁・山林・工場・生産施設・家財などの平和的國富の減失・減耗・荒廢による被害 42,400 億圓（昭和 23 年末公定價格）を昭和 9—11 年基準生産財實效物價でデフレートすれば 28,456 百萬圓となる（公定價格表示であるので實效物價でデフレートするのは適當ではないが概算は把握しえよう）。これは上に記した昭和 5—27 年の純資本形成 66,294 百萬圓の約半額に當る。そこで 66,294 百萬圓は戦災分としてその半額だけインフレーションしているとし、かつ昭和 5 年の資本係数を 4 と假定すれば、昭和 27 年の資本係数は 5.5 というやや plausible な値に近づいてくる。

戦災の各年別推計は困難であるかもしれないが、この點に考慮を加えない以上少くとも net の資本形成についてわれわれは現實の把握をなしえないのではないかと思う。

以上に述べたところは推計改善に當り實行不可能に近いというそしりをうけるようにも思われる。しかしそれは國民所得統計の一層の改善を願つての上のことにほかならない。實際の推計という作業には多大の困難があり、そしてそこにはまた多くの努力が費いやされたことと思う。このような地道な作業はややもすれば華々しい理論の蔭にかくされて忘れられがちであるが、かかる作業こそ理論の發展の基礎を與え、あるいは政策の樹立・遂立に一指針を與えるものであろう。（藤野正三郎）

大川一司

『農業の動態分析』

如水書房 1954 337 頁 580 圓

計量經濟學の傳統は殊に農業經濟學の分野では新しい。そうして農業經濟學の分野で最も集中的に此方向に向つての仕事を積み重ねて來られたのは本書の著者である大川氏であると思う。大川氏の業績は農業經濟學に於ける最も新しい傾向を代表する所のものである。大川氏は終始此分野に於けるパイオニアであった。併し嘗ては此分野に於ける研究者の數は少くて、大川氏は獨自の分野で仕事をして居られるように見えたが、今では大川氏自身の仕事も積み重なつたし、大川氏の周邊には若い多數の有能な研究者が集つて、此方面での強力な協同作業が進みつつある。少し大げさに言えば、農業經濟學に於ける、言はば「大川シュール」とでも言うべきものが形成されんとしつつあるように見える。

本書の取扱う所は長期動態であり、著者は農業問題を、within agriculture の立場でなく、between industries の立場でもなく、within national economy の立場から取扱う意圖を表明している。(緒論) 本書の構成は3篇から成っている。第1篇は若干の國についての長期動態の分析であり、第2篇の取扱う所は國際比較であって、第1篇が言わば縦の(時間の)系列を取扱っているのに對して、此處では横の(各國比較)比較を試みている。第3篇では戦後の我國農業の構造變化の解明が試みられている。本書の全體の構造から言えば、第3篇は或意味では前2篇の分析の應用的な部分であり、我國農業への分析の適用であり歸結である部分であって、前2篇の結論とも言うべき性格を備えている。それ自體として重要であるが、本書の主要課題ではないと思う。又、第2篇の分析は、「同時期に於ける國際的系列による横の比較は歴史的系列による縦の分析と同性質のものではない。けれどもきはめて強い程度に於て前者は後者の代替物となり得る」と考えていた(111頁)と著者が言っているように、データの不足を補足する意味が強いのである(著者は國際比較にはこれ以上の意味があると考えようになつたと言っているが)。従つて本來的な本書の主要部分は第1篇に於て、第2篇は第1篇の中に含まれるものと考えて一應差支えないと思う。即ち、國民經濟の生長過程に於ける農業の長期動態の解明こそ著者の本來的な課題なのである。

内容的に見ると、本書の構成は2つの構成部分から成っている。即ち「理論」と「計測」の兩部分から成っている。勿論この2つは殆んど總ての論文の中で兩者不可分の形で結合されているけれども、分けて考えた方が便利である。

著者の農業の長期動態の理論は、Ricardo, Marx, Marshall, Harrod, Theodor Schultz に負っている。著者は少くとも、之だけの經濟學者の名を擧げて論及している。併し此中に Marx に関して論及している部分は全體の理論構成の上には補足的な地位を占めるに過ぎない。Marshall についても、大きく見れば同様だと言つてよいと思う。長期動態理論として、著者の念頭に最も強くあるのは Ricardo, Harrod, Schultz の體系である。Ricardo の周知の命題、地代上昇、實質賃金の上昇、利潤率低下、に至る經濟的發展の歸結についての命題は、著者が課題とする所と一致する問題意識の上に立てられた議論であり、正に著者が言わんとする所の長期動態理論に相當するようである。Ricardo のヴィジョンがそれ以後の經濟的發展の事實に徴して當嵌らぬことは言うまでもなく明らかであるが、問題は寧ろ彼の理論構造自體

の中に、即ち、レレヴァントな經濟量の把握と、之等の經濟量の相互間の關係のモデルの作成自體の中にあり、此意味で Ricardo の理論は依然として不朽である。

著者の理論構造の今1つの支柱は Theodor Schultz の需給均衡生長率の式 $G_a = \eta g + p$ (G_a は農業に於ける純生産物生長率、 η は農産物の所得弾性値、 g は國民經濟に於ける1人當實質所得成長率、 p は人口増加率) である。周知のように Schultz はアメリカの農業に關して此問題を持出したのであつて、Ricardo とは全く相反するヴィジョンの上に立っている。

著者に取つての今1つの理論的武器は Harrod の steady growth の式 $GC = s$ である。此式と著者によつて、 $G_a C_a = S_a + a$, $G_n C_n = S_n + \beta$ (此處に a 及び n は農業及び非農業を指す) と書替えられる。(但し此式は Harrod が Dynamics の中で此式を用いたのとは異つた意味で用いられていることに注意する必要がある。)

さて、本書の主要部分は言う迄もなく計測から成つており、大川氏の主要業績も亦此處にある。計測は長期動態の理論構成の線に沿つて、その概念構成に従つて行われる必要がある。併し率直に言つて、本書の中では計測の分野では Harrod や Schultz の線は餘りはっきりと出て來ないのである。全體を貫く思想の流れは Ricardo 的であり、古典學派的であるように思われる。著者も言つておられるように、此處での計測の中核の概念は「勞働生産性」であり(7頁)、勞働生産性の時間的系列での比較、國際的比較が計測に於ける著者の主要な仕事の内容となつていたのである。勿論 Schultz 乃至 Harrod の理論體系と著者の計測とが全く無關係だという譯ではない。前に掲げた式との關聯について言えば、 G, G_n, G_a, g_a, g_n の計測は言う迄もなく本書の勞作の中心課題である。又、 p_a は例えば2篇7章、1篇3章に於て、また η はエンゲル係數(第1、第2)の計測、その國際比較という形で展開されている(例えば2篇5章)。 $G_a C_a = S_a + a$ に於ける a の問題——之は資本主義的發展の初期に於て、農業に於ける租税、高率小作料が資本主義的諸産業への資本供給の源泉となつたという議論と深い關聯を持つ——も取扱われていない譯ではない(1篇3章補論)。併し、どちらかと言へば、計測に於ける著者の態度は Ricardo の意味に於ける古典學派的であり、その中心概念は勞働の「平均生産性」なのである。

「勞働生産性」と共に大川氏が計測の分野で取上げて問題としておられる今1つの點は農産物の價格の趨勢の問題である。併し價格(農産物の相對價格)については大川氏の長期動態理論の1つの中心思想になつてい

い。Schultz の需給均等、不均等の過程の理論は相對價格の變化の成立を説明するけれども、その量的な大きさについての手掛りとはならない。此處でも大川氏の考え方は、労働生産性との結びつきを想定する意味で Ricardo 的である。何と言つても、Ricardo の分析の線は農産物價格の長期變動について問題とする場合の出発点となるのであろう。長期動態ということになると Marshall 流の價格理論は必ずしも之に適合するように構成せられていない。

Harrod 流の式 $G_a C_a = S_a + a$ の線に沿う農業の長期動態の分析は本書の計測の分野で残された最も大きい問題点であらう。前に述べたように、それは全く觸れられていない譯ではない（1 篇 3 章補論）が、基礎工作が本書の中で行われていないと言つては本書の中では未着手の分野である。何よりも C_a の量的把握が行われていないし、 S_a についてもその大きさは不分明である。何遍も述べるように、大川氏の仕事は従来、 G, g_a, g_n, η, p_a を中心として展開されている。そうして今 1 つの線が農産物の相對價格の分析なのである。資本に関する部分は大川氏の仕事の中で本書では残される最も大きい部分である。此分野については、例えば野田孜氏の農業に於ける資本係数の累年の計測などがあるが、（經濟研究 5/1）私共は大川氏を中心とする此分野に於ける研究の一層の展開を待つこと切なるものがある。

概括的に言えば、本書は極く平凡な、何の變哲もない書物である。此處で平凡という意味はオーソドックスと言つて意味である。特に新奇なアイデアがある譯ではないし、「鬼面人を驚かす」と言つた類のことは本書の何處にも見られない。本書の研究方法は眞の意味でオーソドックスである。併し本書に示された仕事の推し進め方には大川氏獨特の「味はい」がある。例えて見れば、1 歩 1 歩前進するのに廣い道を切り開き、一々コンクリートで舗装しながら進む、と言つた風のやり方である。その 1 尺 1 尺の前進にかけられたエネルギーは大變なものであり、またその 1 尺 1 尺の完成のため用いられた知識の集積の背景は大變なものである。此處に大川氏の仕事が一見誰にでも眞似が出来そうで、實は眞似ることの容易でない理由がある。名醫の見立ては一見平凡であるが、駆け出しの醫者にはその平凡な見立ての蔭にかくされた修練が缺けている爲に、名醫の見立てのような安定感がないのである。經濟理論の的確な把握、既存の各種の統計資料についての充分な知識、統計の處理についての不必要と思われる程の慎重さとエネルギーの投下、之によつて大川氏の切開いた所は太陽の光の降り注ぐ沃野となり、何人によつても利用可能な共通の財産となる。之こそオーソドックスの研究方法の持つ強味である。

（篠原泰三）